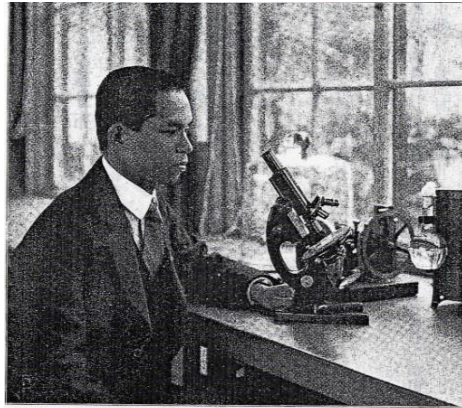


# 佐藤清明資料保存会会報

No. 7



博物学者 佐藤清明 (1905-1998)

佐藤清明資料保存会  
里庄町立図書館

2021.3.20.

## 会報第7号 もくじ

1. あいさつ	佐藤清明資料保存会副会長 生宗 脩一	1
2. 巻頭論考：里庄町の自生植物・・・身近な植物・・・	理事 安原 清隆	2
3. 令和2年度佐藤清明資料保存会主催事業の記録①		9
4. 特別展「池田厚子様と佐藤清明ゆかりの菊桜展」		10
5. 原田文学館特別展「佐藤清明展 里庄の博物学者“せいめい”さん」開催中		12
6. 令和2年度佐藤清明資料保存会主催事業の記録②		13
7. 編集後記		13

表紙写真：第六高等学校理科教室助手時代の佐藤清明（20代）

## あいさつ

令和3年1月新型コロナウイルス感染者数は拡大してピークに達しましたが、3月に入ると岡山県内でも感染者数が減少傾向となりました。

こうした中、文化活動も徐々に、感染防止対策をとりながら開催する方向で進められているようです。

本会の会報 No.7の発行内容について、巻頭論考で植物研究に詳しい安原清隆理事が専門分野の内容を寄稿していることにはじまり、展示会等の充実した内容の編集となりました。それが「池田厚子様と佐藤清明ゆかりの菊桜展」及び「原田文学館特別展・佐藤清明展－里庄の博物学者“せいめい”さん－」と続きます。

展示会の資料について、佐藤清明関係資料等は保存会の皆様の協力により、資料のほとんどが里庄町立図書館内の保存箱に収納され、そのデータ化も進みタイムリーに検索できるまでになりました。

池田厚子様と佐藤清明の写真は、伊藤智行理事が膨大な写真資料の中から抽出して提供することができました。これも平素から検索作業を行ってきた努力の賜物です。

この写真により展示会開催の運びになり、この写真の公開について里庄町関係者のご協力を頂いた事も特筆すべき事項になりました。

不鮮明なガラス乾板の写真を鮮明に拡大印刷できたのは、徳山容理事の写真技術の賜物でした。この写真展示は新聞報道にも取り上げられました。

また、原田文学館における長期間展示については、原田英樹館長のご配慮により、遠藤堅三様、奥富紀子学芸員の企画によるものです。

企画展図録と展示内容に見られるように、短期間に清明資料を検討され、見る人に興味・関心を持たせる素晴らしいものになりました。

上記二つの展示会の成果については、計らいを超えた力が働いているのではと私は感じています。

次に、清明研究会に於いては分科会を設け、資料内容の研究を深めていく予定です。皆様のご指導、ご協力を一層よろしくお願い致します。

おわりになりましたが、中尾茂男図書館長が3月末を以て、退任されるとのことです。平成30年(2018)保存会設立準備段階より4年間、副会長としての任務に携わって頂き、特に町立図書館内での資料保存と活用にも御尽力頂きました。この紙上をもって厚く御礼申し上げます。今後ともご支援を賜りますようお願い致します。

令和3年3月

佐藤清明資料保存会副会長  
生宗 脩一

## 巻頭論考

# 里庄町の自生植物 身近な植物

理事 安原 清隆

里庄町誌 (1) が発行されたのは約 50 年前のことである。町誌には、**里庄町の自生植物目録**が掲載されている。まとめられたのは、郷土の植物岩石研究者であった横溝熊市先生である。そして、佐藤清明先生が校閲されている。本目録には、里庄町の自生植物が、115科783種 (2) と記載されている。ここでは、里庄町の約800種の自生植物の中から、前半で、身近な植物として春の七草と秋の七草を選んで述べる。また、後半では樹木を取り上げる。それぞれの植物について筆者が、イメージした種や事柄なども加える。

### 有名な春と秋の七草の和歌がある。

#### 春の七草

せり、なずな/おぎょう、はこべら/ほとけのざ/すずな、すずしろ/これぞ七草

#### 秋の七草

はぎのはな/おばな、くずばな/なでしこのはな/おみなえし/また、ふじばかま/あさがお  
のはな

/ は和歌の形式 (5, 7, 5, 7, 7) に合わせるように筆者が入れたものである。

調べてみると、春の七草の歌の作者は、四辻善成が通説となっている。秋の七草の作者は、よく知られた万葉の歌人山上憶良である。

和歌に歌われた順にそれぞれの植物を取り上げる。冒頭で述べたように思いつくままの知見等も述べる。

### 春の七草の冒頭の草、セリから始める。

○セリ (芹) は、田んぼの畔や水辺に生えるセリ科の多年草であり、栽培もされる冬野菜である。セリは、キアゲハの食草の一つである。花茎が伸び始める頃からキアゲハの幼虫が葉や茎で見られるようになる。触ると角状の突起を出して異臭を放つのを経験された人も多いことだろう。セリ科の外来種で葉が細かく裂けたパセリは、肉料理のつまやサラダに利用されている栽培植物である。これにもキアゲハの幼虫が発生する。

○ナズナは、アブラナ科の越年草で冬から初夏に、田畑や道端で普通にみられる雑草である。

花茎が伸びる前の放射状に地面に張り付くように伸びた葉（ロゼット葉）を食用にする。ナズナを方言で撥草（バチ草）とかぺんぺん草と呼ぶのは、果実を三味線の撥に見立てたことから。また、類似の帰化種マメグンバイナズナを春から晩秋にかけて路傍で多く見かけるようになった。冬にもロゼット葉の姿で生えているはずだが筆者は、これを確認していない。果実が軍配に似ている（マメは小さいという意味）ことが、種名の由来である。里庄町の自生植物目録 (2) に記載がない帰化種で、アブラナ科のオランダガラシ（クレソン）が、新庄川の各所に群生するのを見かける。

○オギョウはハハコグサのこと。キク科の越年草で、道端や畑で見られる。全体が白い綿毛に覆われていて頂部に黄色い花序をつける。葉が綿毛で覆われた、本種によく似た植物に、チチコグサやチチコグサモドキなどがある。

○ハコベラは、ミドリハコベのことでナデシコ科の越年草である。当地では、ヒヅル (3) の方言で呼ばれている。

ミドリハコベに類似のコハコベも同じ頃、見かける。識別には、高倍率のルーペ等で種子を観察することが必要である。

○ホトケノザは、キク科の越年草で標準和名コオニタビラコのことである。コオニタビラコは田んぼや畔に生えていて、ロゼット葉の頃、七草として利用する。類似のヤブタビラコがある。ロゼット葉の頃には、識別に迷うことがあるが、開花期には、種の特徴が出るので識別は容易である。

一方、標準和名ホトケノザは、シソ科の越年草で 7~8 月の盛夏の季節を除いて（実は見逃しているのかもしれない）、冬季でも耕作地や路傍で見かけ、冬季に開花が見られるのは温暖化の影響だろうか。

○スズナ（鈴）は蕪（かぶ）のことで丸い大根、○スズシロは長い大根に当たる。アブラナ科の越年草。調べてみると原産地は、中央アジア、中国の説がある。中国では、紀元前ごろから、野菜として栽培されていたようだ。わが国へ、中国から渡来したのは古墳時代のことで当時、すでに丸大根（スズナ）と長大根（スズシロ）が異なった品種として認識されていたことに驚く。それぞれの種子が区別されて存在していたということである。品種と言う概念があったのだ。現代では、これらは品種改良され、農地で栽培する主要な冬野菜となっている。普通、越年生野菜として栽培するが、年が明けてから播種し栽培する一年生の品種もある。

## 秋の七草について述べる。



○ハギ（萩）は、マメ科の多年生植物で日当たりの良い里山で見られる。町内にはツクシハギ、ヤマハギ、マルバハギ等がある。これらの識別には、花やがく、果実等をルーペで観察することが必要である。園芸品種にミヤギノハギがある。白花品種もあって各地の公園や個人の庭園でも植栽されている。毎年、鴨方の町家公園で見る花は見事である。



○オバナ（尾花）は、ススキのこことである。里山や丘陵地に普通にみられる大型のイネ科の多年草である。葉が虎斑入り品種のタカノハ（鷹の羽）ススキが庭園で植栽される。また、沿海地に自生する、より大型で冬も枯れないトキワススキ(4)を町内の丘陵地で、まれに見かけるが、里庄町の一部が瀬戸内海の沿岸部だったことを物語るものであろう。



○クズバナ（葛花）は、マメ科のクズのこことである。多年性つる植物で地上部は、冬には枯れる。地中深く伸びた根茎は長大である。これから作る奈良県に産する吉野葛は有名である。里山よりも人里に多く自生し、夏から秋にかけてツルを伸ばした3出葉が密生して草地を覆い、日が当たらなくなった下草を阻害し枯らす。葛の総状の花は、紫色で上向いて咲き芳香がある。

○ナデシコ（撫子）はナデシコ科の多年草で標準和名カワラナデシコである。人里の丘陵地に自生する。里庄町にも自生していたようであるが、現在は絶滅したと思われる。(2) なでしこジャパンの愛称は広く知られたところである。大和なでしこという言葉がある。万葉人が秋の野で見るカワラナデシコから、大和なでしこをイメージしたのだろう。海岸の崖などで見られるハマナデシコが、町内に自生していたようであるが(2)、現在は絶滅したと思われる。約 500





年前、里庄町の一部が瀬戸内海の沿岸であったことを物語るものである。(4) 町誌発行後に帰化したと思われるコモチナデシコを国道 2 号沿線で多く見かけるようになった。コモチナデシコ類似種については、識別に高倍率のルーペを用いた観察が必要である。



○オミナエシ（女郎花）は、かつて、町内の里山で普通に見られたオミナエシ科の多年草である。ところが、現在では、山の雑低木や下草、そして、地面を覆う落ち葉の除去等をしなくなった。昭和 30 年代からプロパンガスが普及し、燃料としていた落葉した松葉や枯れ枝等が不用になったのが理由である。燃料を山に依存しなくなって、連綿と続いてきた里山

の管理が、なされなくなった山には、日照不足、風通しの悪化、富栄養化等が起こった。現在の山は、往時の里山の環境とは遠いものである。

オミナエシは、虚空蔵山系で 2019 年に自生を確認したが、その後、見る機会がないままで、現在どうなっているのか気がかりである。町内自生植物として同じ科のオトコエシの記載があるが、筆者は町内で見たことはない。絶滅したと思われる。



○フジバカマ（藤袴）は人里の植物である。筆者は、約 20 年前に、偶然、自宅近くの竹やぶの入り口で見つけて保護している。キク科の多年草で旺盛な繁殖力を持っていることを実感するが、奈良時代に大陸から渡来した帰化植物と言われている。長距離を旅する蝶として有名なアサギマダラが群れて、フジバカマの花の蜜を吸う光景をテレ

ビ番組で見たことがある。桜餅を包んでいる桜の葉の香りがクマリンの香りである。フジバカマにも、草全体クマリンの香りがあるが、香りは生乾きの時に強いように思う。万葉の時代には、貴婦人たちが懐中に香るフジバカマを忍ばせていたそうである。



○アサガオ（朝貌）は、夏の朝、咲く誰でも知っている馴染み深い園芸植物であるが、七草で歌われた朝顔は、現在のキキョウのことという。キキョウは、里山に自生するキキョウ科の多年草である。町内でも日当たりの良い松林の下に咲く青紫色の目立つ花が見られたものである。しかし、山に人の手が入らなくなった里山では、絶滅が危惧される植物となっている。また、キキョウ科のサワギキョウ

が、虚空蔵山の湿地に自生していたが、これも絶滅が危惧される植物の一つである。人里ではキキョウの花を小型にした花をつける多年草のヒナギキョウが、日当たりの良い、やや乾燥した地に自生する。近年、キキョウ科の帰化種キキョウソウが道端や空き地で見られるようになった。本種は一年草である。花が美しいので庭に植えたりすると、こぼれた種から、翌年には雑草化して困ることが起こる。帰化植物の扱いには、注意しなくてはならないと思う。

以上、春、秋の七草を中心にして、身近な植物や思い浮かぶまま関連する事柄などを述べた。七草は、おそらく奈良（万葉）時代以前から我々の祖先が、目にし、利用し、愛でてきた植物であろう。

## 後半は、里庄町で身近に見る樹木をとりあげる。

○クサギ、シソ科の落葉小高木、以前はクマツヅラ科に入れられてきた。人里で見かけることも多い木で葉に悪臭があることが種名となっている。筆者は食べたことはないが、若い葉を茹でて食べることができるそうだ。盛夏から初秋にかけて花をつけ、紫色のガクと長い花糸が目立つ。よく、アゲハ蝶が蜜を吸いに花に止まっているのを見る。

○ネズミモチ、モクセイ科の常緑高木で、角質の葉は対生する。6月ごろ白色の花をつけ、芳香がある。種名は、秋、黒色でネズミの糞に似た果実をつけることに由来する。方言でネズミ木<sup>(3)</sup>と呼ばれる。外来種のトウネズミモチが公園等に植えられている。こちらは果実が、より多く実り、色がやや薄いように感じる。

○ヤブツバキ、ツバキ科の常緑樹で成長は遅いが小高木～高木となる。里庄町の木はツバキである。町の記念事業として、園芸品種の苗が各戸に配布されたので、町内で広く植栽されている。町民にとって最も身近な樹木の一つであろう。ツバキの花の蜜を求めてメジロが訪れることは、よく知られている。その他にもヒヨドリやウグイスなども花に集まる。



○ヒサカキ、ツバキ科の常緑小高木。クササキ (3) の方言で呼ばれる。元来、サカキの代用品として利用するが、仏前に供えることもある。種名はサカキに似て卑なるものの意味から。雌雄異株の木で春分の頃、開花し、強い香を生じる。人によっては異臭と感じるようだ。晩秋になると約3ミリの球形果実が黒く熟し、冬季の鳥たちの餌となる。メジロやウグイス、ジョウビタキなどの小鳥を見かける。より大型のヒヨドリやツグミなども訪れる。

○ナナミノキ、モチノキ科の常緑高木で、目通り直径が30センチを超える大木が町内各地にある。雌雄異株で冬季に赤く熟した果実を遠望できる。あおぎ (3) の方言で呼ばれる。

○アカメガシワ、トウダイグサ科の落葉高木。さいもり (菜盛り) の方言で呼ばれる。また、子供時代、近所の年寄りは飯盛り (めしもり) と呼んでいた。若葉が紅色をしていて、葉が柏の葉と同様に食器として使われていたことが種名の由来である。この度、本種について調べてみると日本薬局方に記載の生薬であり、また若葉は食用となることを知った。改めて本種が有用な樹木であることを知った。

○センダン、人里に見られるセンダン科の落葉高木。大型の羽状複葉をつけるが、樹下は、決して暗い日蔭にならない。5月ごろ水色の複集散花序をつける。職場の近くにセンダンの大木があった。花の頃、樹下に立つとカタルシスを感じたことを思い出す。センダンは、晩秋には、径7~8ミリの果実が白黄色に熟し、翌年の春先まで残った果をツグミやヒヨドリなどが啄みに来る。センダ、センダの木 (3) の方言がある。子供の頃、この木に多くとまって鳴くクマゼミのことをセンダ (3) と呼んでいた。

○ヤマザクラ、山地に自生するバラ科の落葉高木。○ケヤマザクラ、○ウスゲヤマザクラ等は類似している。ヤマザクラ類は花が咲く前に葉が展開することが、ソメイヨシノとの大きな違いである。3種は、花柄やがくの毛の状態、葉の蜜腺の観察から識別できるが、困難な場合もある。○カスミザクラも町内に自生する山桜で前2種よりも花が、10日~2週間遅れて咲くのを遠望でき、同定は比較的容易である。カスミザクラには八重の花を咲かせる個体が簡単に見つかる。ソウドウザクラやキクザクラほど花弁は多くないが、探せばより多くの花弁をもつ八重系の個体も見つかるかも知れない。桜について筆者の誤認があるかもしれないことをおことわりしておく。

○クスノキ、山麓や寺社の森で多く見られるクスノキ科の常緑高木である。町内ではセンダン、ナナミノキ、アベマキ、アラカシ、エノキと並ぶ大木がある。全国に、樹齢数百年の巨樹が知られていて、各地の天然記念物に指定されている。また国の天然記念物の木がテレビ番組で紹介されることもある。クスノキは小木から大木まで数えると無数と言っていいほど町内に自生している。アオスジアゲハの食草であり、この蝶が多く見られる理由は、クスノキが町内各地にあることに関係すると思われる。

○**アキニレ**、人里に見られるニレ科の落葉高木。ニレとか、ニレノキの方言で呼んでいる。(3) 果実に翼があり、風で拡散する。幹を切っても萌芽し絶えることがない。子供たちはカブトムシやクワガタムシなどが樹液を求めてこの木に集まることをよく知っている。葉をもむと粘々するので我々の子供時代には、ネバノキと呼んでいた。

○**エノキ**は、ニレ科からアサ科に変更された落葉高木である。町内では屋敷に植えられた目通り径 50 cm を超える大木を見かける。昔は街道の一里塚として植えられていた。エノミ (3) の方言がある。オオムラサキやゴマダラチョウの食草である。7~8mm の球形果実は橙色に熟す。子供時代に食べたことがあるが、果肉はザラザラとして甘みは感じられなかったように記憶している。本種は幹を切っても萌芽性がある。繰り返して切られた丸まった株を見かけることがある。

○**ムクノキ**はニレ科からアサ科に変更された落葉高木で山麓や人里で大木を見かける。エノキのように屋敷で見られないのは何故だろう。果実は黒く熟し果肉はジューシーでエノキの実より甘かった。子供の頃の思い出である。

○**アベマキ**、ブナ科の落葉の高木で山麓や人里で大木を見る。目通り直径が 50 cm に達する個体もある。コルク質の樹皮は分厚くて椎茸の原木栽培には適さないそうだ。幹を切っても萌芽性がある。我が家では、柏餅の柏の葉の代用として使われていたことを思い出す。ヤママユ蛾の食草の一つである。

○**コナラ**は、ブナ科の落葉高木。わたしは町内で高木を見ないが、もっと探せば見つかるかもしれない。コナラはハウソウマキ (3) の方言がある。椎茸の原木栽培に適した木であるのは樹皮のコルク質が薄いからであろう。アベマキでは枯れ葉が年内に落葉するが、コナラでは枯れ葉が年を越しても、なお残っている。

○**アラカシ**は、ブナ科の常緑広葉樹で町内でも大木がある。山麓や人里で見られる。本種の樹下は、薄暗くて日照を妨げるので下草は育ちにくい、ラン科のミヤマウズラやツツジ科のイチヤクソウがあった。冬季、山なげを行っていた時代のことである。アラカシは刈り込んで生垣としたり、公園に植栽されるのを見かける。

○**アカマツ**は、マツ科の高木の常緑針葉樹。幹が赤く見えることからアカマツと呼ばれる。里山が管理されていた当時は大木があった。触っても痛くない柔らかい葉から方言でメンマツ (3) と呼ぶ。サシバが毎年5月頃、渡ってきて高木のアカマツに巣を作っていた。樹下ではソクシンランが咲いていた晩春の頃だった。

○**クロマツ**は、マツ科の高木であり、硬くて葉先が鋭いことから方言でオンマツ (3) と呼んでいる。かつて近所に黒松の大木があったが、1960 年頃枯れた。クロマツは沿海地に多く自生す

る木なので、昔、瀬戸内海沿岸だったことを想像させる。町誌には次のような興味深い記述がある。現里庄町は室町末期のころまで北半域は本州の海岸線、南域は大島と呼ぶ島であった。(4)庭木や盆栽に多く利用している松は黒松である。建築用の木材としては黒松より赤松のほうが優れているようだ。不動院の参道のクロマツにヤドリギ科のマツグミが寄生している。町内ではマツグミは絶滅が危惧される植物なので大切に见守りたい。

○ネズミサシはヒノキ科の常緑針葉樹で人里の丘陵地で高木を見かける。種名のネズミサシは、葉の先が硬く鋭くとがっていてネズミを刺すといったような意味であろう。実際にネズミの通路にネズミサシを置いて侵入するネズミを撃退することが行われていたらしい。モロギ(3)の方言がある。衰退したアカマツよりネズミサシが針葉樹としてかつての里山で繁栄しはじめたように思われる。

以上、独りよがりの身近な植物を取り上げた。勉強不足で誤認があるかもしれない事をおことわりしておきます。

- (1) 里庄町誌、昭和46年11月1日、里庄町発行
- (2) 里庄町誌、P.P599-614 第5節 里庄町の自生植物目録
- (3) 里庄町誌、P.P512-522 第18章 第1節 3 植物方言
- (4) 里庄町誌、P.7 第2章 地質 第1節 瀬戸内海のなりたち

\*\*\*\*\*

## 令和2年度佐藤清明資料保存会主催事業等の記録 ①

### 2020/06/19 山陽新聞記事「人魚のミイラ」再発見！

佐藤清明資料の内「ネガフィルム」の中に「人魚のミイラ」の画像があることが分かり所蔵されている天台宗圓珠院に赴き拝観したことが紹介された。(記事コピー：里庄町立図書館所蔵)

### 2020/07/01 「月刊タウン情報おかやま7月号」「岡山の妖怪」特集で清明資料紹介

当会顧問の木下氏監修のもと、岡山の妖怪が特集され、佐藤清明と『現行全国妖怪辞典』『備中南部に於いて信じられている妖怪の一覧表』が紹介された。(同誌：里庄町立図書館所蔵)

### 2020/07/18 「第1回清明を読む会」「佐藤清明の妖怪方言収集カード」

講師：木下浩氏(当会顧問、岡山民俗学会理事、長島愛生園歴史館学芸員)

1935(昭和10)年に出版された日本初の妖怪事典『現行全国妖怪辞典』編纂のために使用された妖怪方言収集カードについて、1936年の大阪毎日新聞記事等をもとに論考された。

### 2020/08/01～2020/08/30「第4回 里庄のせいめいさん展」

展示内容：①キクザクラ特集②郷土の植物研究者 横溝熊市の業績紹介と遺品展示③横溝遺品の中から発見された「室戸台風岡山市内被災地図」④人魚のミイラの写真。③④は、山陽新聞に掲載される。笠岡放送、ゆめウェブ、RSK ラジオカー「ラジまる」の取材があり、放映された。

## 特別展「池田厚子様と佐藤清明ゆかりの菊桜展」

第1期 令和2年11月2日(月)～11月27日(金) 町役場1階ロビー

第2期 令和2年12月2日(水)～12月27日(日) 町立図書館1階ロビー

昭和28年10月21日、昭和天皇皇后両陛下が四国国体に先だつて岡山に行幸され、宿泊された後楽園内鶴鳴館北庭にキクザクラ2本を植樹された。キクザクラは、岡山池田家に降嫁された順宮内親王のお印であり、佐藤清明が育てた苗が植樹されたことは関係者の記憶の中にあつた。

佐藤清明資料保存会では、博物学者として活躍した佐藤清明が残した膨大な資料の整理を進めている。多岐にわたる資料の中には、これまた膨大な量の写真フィルム・ガラス乾板が含まれているが、この度、63枚の写真ガラス乾板の中から、岡山市の池田邸で撮影された池田厚子様と佐藤ほか関係者との記念写真と、前庭に佐藤自らが菊桜を植樹している様子をご覧になる厚子様の写真が発見された。関係者の記憶が記録として確認されたことが今回の展示の動機となった。

菊桜は4月中旬から5月上旬にかけて咲く花卉が100～350枚にも達する菊咲きの桜である。かつて御所桜の一つとされた名花で中世に消失したとされていたが、明治40年(1907)岡山大学の前身のひとつ第六高等学校大渡忠太郎教授によって発見され、東京帝国大学三好学博士によりキクザクラと確認された。

母樹は岡山空襲により焼失したが、その前年の昭和19年(1944)戦禍から守るため佐藤が一枝を里庄町の地で継承していた。この樹を母樹にした苗が皇居および池田邸にも植えられた。

昭和6年(1931)順宮厚子内親王御誕生 菊桜が順宮のお印とされる。

昭和27年(1952)厚子様と備前岡山の池田隆政氏が御成婚。

昭和28年(1953)5月に池田邸の庭に佐藤が菊桜の苗を植樹する。

同年10月には天皇皇后両陛下が、四国国体のとき岡山へ立ち寄られ(行幸)、岡山後楽園に佐藤が育苗した菊桜2本を植樹された

(昭和28年10月22日の山陽新聞記事参照)

佐藤が里庄の地で継承していた菊桜を母樹にした苗は、岡山後楽園、岡山大学、六高記念館、岡山県立朝日高等学校、三徳塾(現・岡山県立青少年農林文化センター三徳園)、里庄町内の高岡神社等に植樹された。

また、令和元年12月に至り、佐藤清明資料保存会キクザクラ基金による事業として、佐藤家に残る母樹をもとに、里庄町歴史民俗資料館前庭に2本を植樹した。



図書館での展示作業風景



展示パネル

池田厚子様と佐藤清明ゆかりの菊桜展



七変化するキクザクラ

池田厚子様と菊桜

池田厚子様と佐藤清明ゆかりの菊桜展



昭和天皇の岡山行幸、六高同窓会による菊桜保存活動等の様子を伝える新聞記事

清明研究会・清明を読む会・企画展等、菊桜保存活動の様子を紹介



# 原田文学館特別展「佐藤清明展 里庄の博物学者“せいめい”さん」開催中

2021. 2. 24. ～ 8. 25.

原田文学館は、生石高等女学校創設者原田林市氏の長男で、国学院大学高等師範部に学び、若くして「新万葉集」に歌が選ばれた歌人原田進(1910～1939)の記念館。父が創設した女学校の教諭となり教頭に就任。今に歌い継がれる校歌を作詞したが、出征し29才で亡くなった。

設置者・館長は、ご長男で外科医の原田英樹氏。手紙など約150点を常設展示。この度、佐藤清明が女学校教諭として勤務していたご縁で、文学館企画の主催事業として特別展を開催していただけることになった。

開館は、(月)・(火)・(水)の11時～16時  
 土・日曜日/予約制 休館日/木・金曜日  
 入館料無料・臨時休館日あり・Pあり



佐藤清明の展示コーナー



研究報告書・著作物等



佐藤清明年譜



フィールドワークの七つ道具類



フィールドノート

## 令和2年度佐藤清明資料保存会主催事業等の記録 ②

### 2020/09/19 第2回 清明を読む会「明治以降の岡山県における民間の植物研究の軌跡」

講師：土岐 隆信氏（当会顧問 株式会社エバルス顧問）

古事記・日本書紀に始まる本草学の流れをたどり、明治以降に活躍した県内の植物研究者とその業績、特に今回は里庄出身の研究者の業績を紹介。

### 2020/11/2～2020/12/27 特別展「池田厚子様と佐藤清明ゆかりの菊桜展」

第1期 令和2年11月2日（月）～11月27日（金）町役場1階ロビー

第2期 令和2年12月2日（水）～12月27日（日）町立図書館1階ロビー

中国新聞、山陽新聞の取材を受け記事が掲載された。

### 2020/11/21 第3回 清明を読む会「川上町の文化財―清明さんのフィールドノート1」

講師：佐藤健治氏（佐藤清明資料保存会理事）

清明さんの主な著作物『天然記念物調査録 全50巻』の「川上の一」（昭和29年6月調査）を活字化、その内「大賀デッケン」の部分を紹介。

### 2020/12/15 雑誌「高梁川」第78号記事「佐藤清明―里庄町が生んだ知の巨人」

高梁川流域連盟からの要請を受け、生宗副会長が、機関誌「高梁川」の記事として執筆。

佐藤清明研究の最新の成果をふまえて、13ページに凝縮した基本文献となる珠玉の論考。佐藤清明の世界の魅力が伝わる。（本誌：県内図書館所蔵・里庄町立図書館で貸出可）

### 2021/2/24～8/25 特別展「佐藤清明展」 主催：原田文学館（浅口市鴨方町六条院中）

開館日・時間：月・火・水曜日の11時～16時（祝日は休館）入場料：無料

佐藤清明が、昭和3年から数年間、鴨方町の生石高等女学校（現・原田学園おかやま山陽高等学校）に教諭として勤務していたご縁で、原田文学館の企画・主催による「佐藤清明展―里庄の博物学者“せいめい”さん」開催中。（同時刊行の図録：里庄町立図書館所蔵で貸出可）

### <編集後記>

2020年は新型コロナウイルス COVID-19 の蔓延により、コロナに明け、コロナに暮れる1年となりました。県内町内の公共施設が閉鎖され、解除後も感染拡大防止が求められる状況でしたが、会長・顧問の皆様・会員各位の思いが結集し、振り返ってみると会報の記事に事欠かないほど充実した1年間となったのではないかと思います。さて、会報7号では、佐藤清明・横溝熊市の両氏と採集活動をともにされた当会理事安原清隆氏に町内の身近な植物について寄稿して頂きました。里庄町誌（昭和46年版）とあわせてお読みいただければ幸いです。最後に、今年度末をもって中尾茂男図書館長が6年間の勤務を終えご退職となります。館長の本務の他、館内外の環境整備に努められるとともに、佐藤清明資料保存会の活動にも取り組まれ、会報については、創刊準備号から印刷製本作業の一切を引き受けて下さりこの7号に至りましたことを記し感謝の意を表します。

（理事・会報担当 佐藤泰徳）

佐藤清明顕彰特設サイト



佐藤清明資料保存会会報 No. 7

発行日 令和3年3月20日  
発行者 佐藤清明資料保存会・里庄町立図書館  
会長 加藤泰久(里庄町長) 館長 中尾茂男  
住 所 719-0301 岡山県浅口郡里庄町里見 2621  
電 話 0865-64-6016

ホームページ : <http://www.slnet.town.satosho.okayama.jp>  
Eメール : [slnet@slnet.town.satosho.okayama.jp](mailto:slnet@slnet.town.satosho.okayama.jp)